

論説

ナチスとユダヤ人

上山 敏

はじめに

御紹介にあずかりました上山でございます。私はこのテーマを専門に研究してはおりません。したがって、今日は私が研究している断片的な知識を取り繕いながら、さらに私の想像・記憶を入り交えてお話ししたいと思います。このテーマにつきましては沢山の本や資料が公刊されており、日本語でも多くの成果があげられておりますので、ここでは私の主観的な見方でお話することをお許し載ぎたいと思います。

戦後半世紀経った今日におきましても、ドイツ政府（旧西ドイツ政府）はナチス追放に力をいれており、ユダヤ人迫害に対する責任追求に時効の延期を続行しております。日本の戦後処理と違って、これほど徹底して責任の追求がなされるのは、ユダヤ人問題が国民の心理の内奥にまで滲りわたる外傷トラウマを与えたことによっております。ドイツ人は、歴史的に見ますと、決して純粋なアーリア人種ではありませんが、宗教の違った異民族を抱え込んだために起る人種の差別に苦しんできました。この問題は、第二次大戦後の経済復興のためにドイツに移住してきましたトルコ人（イ

スラム教)への対応についても同じことがいえると思います。

二千年近く、ヨーロッパ人はゲルマン、ケルトの慣習、風俗をキリスト教化し、人類史の中で始めて近代資本主義を誕生させました。キリスト教は、聖俗分離を建前としながら、政治権力の中樞を握り、公教育、大学体制を支配してきました。こうした宗教は世界に類を見ないものですが、また宗教と科学の両立に成功した点でも、他の宗教とは異質な性格をもっております。そのことが近代資本主義の誕生に阻害どころか、積極的な役割を果たすことになりました。脱魔術化こそキリスト教、とくにプロテスタントの生命力でもあったからです。近年経済と宗教倫理との相関性について関心が深まって参りました。日本人のように宗教と経済の緊張関係を経験してこなかった民族は、この問題に鈍感なのですが、ヨーロッパ人は何度もその試練を受けています。キリスト教はユダヤ教を父とした子の宗教ですから、ユダヤキリスト教という風に一体化した感覚で我々はとらえています。このキリスト教がゲルマン、ケルトの土着信仰を追放し、妥協し、たんなる風俗・慣習へと馴致したわけです。キリスト教が意識化される中で、土着信仰は民族の無意識部分におしこめられていきます。このようにしてヨーロッパは科学と資本主義のレベルで未曾有の繁栄を上げたわけです。

ところが、突然に宗教現象の中に地殻変動が起りました。父子の関係であったユダヤ教とキリスト教との一体性がユダヤ人の宗教とアリア人の宗教との対立で互解致しました。さらにキリスト教の中に馴致していたと見ていたゲルマンの神話がキリスト教に謀叛しました。この激震の震源地がナチスの運動であったわけです。宗教現象——これはドイツ人の深層に食い入っています——のねじれ現象をどう解読するか、これがナチスとユダヤ人という今日掲げたテーマの核心にあります。

## 体 験 か ら

さて、始めに恐縮ですが、わたしが以前に当時の西ドイツにおりましたとき体験した印象は、ドイツの生活感情が、非常に清潔だということでした。その清潔感では生活上の秩序観にも通じます。この清潔観が個人レベルの行動で済むならば美德です。しかし社会的なレベルに昇華すると他人の逸脱に対する敵しい嫌悪感に変わります。いうならば息苦しいほど張りつめた倫理に裏づけられますと、不道徳者への排他性と自共同体の内部の相互監視体制が自然に醸し出されます。「補注 戦後の東ドイツのシュタージを考えて下さい」とくに価値観がイデオロギー的に一元化されると、美德そのものが無批判な他者排除の価値に転化致します。ヒトラーに対する拍手喝采の整合性、斉一化の中にそれが秘められていると考えるのは私一人でせうか。

それに対して、民族の離散によって各地に住みついたユダヤ人は彼らの共同体をつくっておりました。やがて「ゲット」化していくわけですが、彼らは長い民族の因習を守り続けました。その中にシリア・アッシリアなど小アジアの魔法も含まれております。彼らはタルムードの法の下に独自の宗教生活をつくりあげていました。彼らは快樂主義にも寛大であり、宗教儀礼を頑なに守り続けたわけであります。彼らにとつて子であるキリスト教の支配に服さなければならぬ屈辱と怨念を、メシヤ主義によって発散します。ドイツ人は、寄生しているユダヤ人のシュムツツリッヒ（汚なさ）な異質さを感じたに違いありません。

対照的なことを、イタリヤで感ずることがあります。ナポリの旗で有名なように、イタリヤでは窓から洗濯物が賑やかな風景に色添えしております。陽気で乱雑で、人間のエゴイズムが包装もされずに剥き出しに出され、無秩序の中で自然な調和がなされている社会。こうした雰囲気はドイツとは違います。ここでは大規模なシナゴグ（ユダヤ

教会)の焼き討ちといったことは考えられません。"ゲットー"という言葉はヴェニス都市の隔離から生まれたのですが、そして、シエクスピアの『ヴェニスの商人』の舞台にもなっているのですが、イタリアでは、風俗とか慣習の面で異質性が感じられないのです。

民族の憎悪というのは為政者のたんなるプロパガンダによって引き起されるものではありません。根深い歴史的風土が重要な意味をもっていると思います。しかもそれには宗教的要素が大きな比重を占めているのです。

#### ドイツにおけるユダヤ人排除の歴史

日本人にはシエクスピアの『ヴェニスの商人』はよく続まれ、色々な解釈が施されているのは御承知の通りです。この作品はエリザベス女王の下で漸く高まった反ユダヤ主義の風潮の中で書かれた作品であります。ただしシエクスピアの名譽のためについておきますが、彼が親ユダヤ的感覚をもっていたことは被差別者シャイロックの口をして語っていることでも分ります。しかし高利貸商人シャイロックのイメージが強烈です。このことは、いうまでもなくヨーロッパに普遍的であり、イギリス、フランス、イタリアにも共有しております。しかし何故ドイツにおいて激しい反ユダヤ主義の運動が起ったのか。このことがナチスのユダヤ人迫害と深く関係しております。

たとえば今あげました『ヴェニスの商人』はドイツでどのようにプロパガンダに使われたでせうか。映画・演劇を国民啓蒙宣伝に利用したゲッペルスは、国際的にも悪名高い芝居『ヴェニスの商人』にヴェルナー・クラウスをシャイロック役に使ったのです。ヴェルナー・クラウスという俳優は、ドイツ表現主義の傑作「カリガリ博士」の主人公役を演じた、映画史上に嘖嘖たる名優として名をとどめている人物です。初演の一九四三年五月一日からこのシャイロック劇は三二回も上演されていたのです。しかも一九四三年はアウシュヴィッツの未曾有の残酷行為が現実に進

行している同時期です。

こういったユダヤ人問題の特有さは、亡命の歴史にもあらわれず。ドイツ・オーストリアから多数の知識人がアメリカに亡命致しました。作家のトーマス・マンや自然科学者のアインシュタイン、法学者のハンス・ケルゼンたちの亡命によって、ドイツ系ユダヤ人の文化がアメリカの土壌に開花したともいえるほどです。

### キリスト教とユダヤ人

ドイツ人を含めてヨーロッパ人がユダヤ人に迫害を加え始めたのは、宗教の緊張に原因します。ユダヤ人に対するポグロムは中世の十字軍遠征に遡ります。ヨーロッパ人は始めて非キリスト教徒、つまり非ヨーロッパ人に出遭ったのです。十字軍は目の前にした敵であるイスラム教徒よりも、イエスを殺したユダヤ人に憎悪を持ったわけです。四、五世紀の民衆の村々を巡回する宗教劇には、ユダヤ学者と論争するイエス、パリサイ人によるイエスに対する審問、ユダの裏切りが上演されました。また一二一五年の第四回ラテラノ公会議では、ユダヤ人を識別するために衣服に黄色の札の着用を強制しています。当時黒死病が流行りましたが、ユダヤ人による井戸への毒物混入とか、儀礼殺人という風聞が流されました。儀礼殺人というのは、ユダヤ人の過ぎ越しの祭りの儀式用のパンのためにユダヤ人はキリスト教徒の血を使うという誣告ですが、これが修道院から広められたのです。

宗教的にキリスト教徒には利子が禁止されていましたが、ユダヤ人がキリスト教に貸付けて高利を貧る高利貸しのイメージがつきまともったのも当然でした。タルムードでは異教徒に対する利子を認めためて起る「二重道徳」が生じたのです。

そのさいに利用されたのは、「ヨハネ福音書」や「ヨハネ黙示録」など新約聖書の中の言葉でした。しかしそのさ

い大きな読み違えをしているのです。新約聖書は反ユダヤ主義ではありません。原始キリスト教以来宗派的敵対者であるパリサイ派とユダヤ人一般と重ね合わせているのです。しかし十二使徒やパウロはユダヤ人なのですから矛盾しているのです。

### 宗教改革とユダヤ人

ドイツ人にとって宗教改革の時代にユダヤ人への態度がどうであったか、という問題は深刻な問いかけです。ある人はナチスの精神の根元はカント、ルターに遡らなければならないと唱えます。私はそういう精神的系譜論には反対ですが、その倫理の通底性には驚くものがあると思います。

ルターは、異教との折衷をはかってきたカソリック教会と断絶したわけですが、その結果として実は親ユダヤ的な立場にあったのです。ヘブライ語で書かれた旧約聖書の原典に還れというルター主義は、人文主義（ヘブライ、ギリシヤ古典学）の支持を得ていたのです。イエス・キリストはユダヤ人の生れであり、我々はアブラハムの後裔である。だからユダヤ人とドイツ人とは同胞であり、兄弟である。しかし宗教改革運動の中でもっとラディカルなセクト、再洗礼派がでて、ユダヤ人のシナゴグとの提携をはかるに至って、そのことがルターを不安にさせたのです。ドイツの農村の生活感情と融け込んでいた彼は、農民の反ユダヤ感情をつかまえております。彼の言説に振幅の激しい揺れを見るのはそのためなのです。あれほどユダヤ人に尊敬の念を懐いていた彼はその態度を急変させました。彼の書いたユダヤ人に関する論文が、四百年近くたって後述致します、いまわしい「水晶の夜」の反ユダヤ人迫害の宣伝のために二百万部が刷られました。

## 社会経済史的背景——労働観

ユダヤ人は、ローマ人による第二神殿破壊（七〇年）後、ヨーロッパ各地に難民となって離散したわけです。ユダヤ人のディアスポラというのはそのことを意味しています。ナチスとユダヤ人というさいに、とくにドイツ人が差別ないし異和感を覚えたのは、ユダヤ人に「労働」観が欠けているということでした。ナチスの宣伝映画の中で上半身裸で鋤をふるうシーンを御覧になったと思いますが、それは土に生きる崇高な論理感と結ばれています。ですからドイツ人がアルバイトという場合、戦後の日本人の使っている副業的な軽い意味と違って、民族固有の神聖な観念をあらわしているわけです。

ところが、離散してやってきたユダヤ人たちは、封建時代のゲルマン社会では土地を保有することは許されませんでした。そのためユダヤ人の多くは仲買人として遠隔地の行商の生業についていたわけです。つまりブローカーの仕事です。そこから零細農民の労働をくすねる、いいかえると搾取者のイメージがつくり出されます。それと前述しました高利貸のイメージです。農民から高利で搾り、家屋敷から追い出すという高利貸ユダヤ人のステロタイプは、農民の感情の中に潜在的に瀰漫していたといえます。そういう農民の反感が都市のゲトロー街で醸成された反ユダヤ主義と一体になり、一八八一年には「ヘップ、ヘップ」という喚声でユダヤ人を襲撃する事件が生じたのです。経済不安を絶えずもっていた農村の中小農民は、広く都市の中産階層が社会運動を引き起すとき、一緒になりユダヤ人をスケープゴートにしたのです。ですから農村においても、大土地所有者であるユンカーたちはむしろこの運動に関心を持たなかったのです。

## 啓蒙によるユダヤ人解放

ドイツにおける反ユダヤ主義という場合、どうしても取り上げておかなければならない問題は、ヨーロッパの啓蒙が生んだユダヤ人解放運動でした。これは一八世紀末から啓蒙絶対制国家の側からユダヤ人に対する政治的解放をなしたわけで、一応法的にユダヤ人は同権を得たのです。

ユダヤ人の側でも改革派がハスカラ派を形成します。西欧の啓蒙思想に共鳴して厳格な宗教儀礼から解放された日常生活を営む運動です。長く歴史的にトーラーに従って遵守されてきたユダヤ教の戒律・習俗を廃止することでヨーロッパの生活慣習と同化しようとするものです。

ところが上からの政治解放は、一般の民衆にとって今までのユダヤ人に対する感覚を、軽蔑ないし無視からむしろサンチマンないし敵意に変えたということがいえます。ユダヤ人は政治的に平等になったわけですから、官吏とか裁判官とか大学教授とか医師にもなることができるわけです。しかし民衆にとってユダヤ人の裁判官の前に立たされることは恥辱だという意識がルサンチマンに転化するわけです。

かくて、ユダヤ人の間でもハスカラ運動が起り、ユダヤ人の知識人の間には、モーゼス・メンデルスゾーン一家にみられるように、ベルリン・サロンがつくられました。大学教授も入ったサロン文化が花咲いたのです。ヘーゲルもそれに関係している。また成金になったユダヤ人は子弟にアカデミックな教育を受けさせます。この頃から医師、弁護士、学者、ジャーナリスト、音楽家、詩人、と自由営業の分野に彼らは進出したのです。

このようにしてユダヤ人の同化政策が進みますが、考えてみますと、これで問題が解決したわけではありません。ユダヤ人のキリスト社会への同化のいきつくところはキリスト教への「改宗」でありましたから、ユダヤ人の間には

「改宗」をめぐるって精神的動揺ないし相互の軽蔑と反目を斉らしたのです。とくに知識人の間では、「改宗」しなければ市民社会の恵れた職に就くことができずしてしたから、余儀ない形で、心理的な裏切りの負目をもつて「改宗」したわけです。だから彼らは、かつて一五世紀の末、スペインで「追放」か、「改宗」かを迫られて、「改宗」して残留したユダヤ人が「マラーノ」(豚)と呼ばれたのと似ています。ユダヤ教徒からもキリスト教徒からも軽蔑された、隠れユダヤ教徒です。十九世紀にもユダヤ人は「改宗」していづれからも白眼視されるという運命を岐ったわけでありませぬ。

こうしたユダヤ人の側からの同化の動きは、新たな反ユダヤ的感情を増殖することになります。それはヨーロッパの市民社会の中にユダヤ人の一部がエリート階層に入ったということです。ユダヤ人は金銭感覚にたけていたため財閥のユダヤ人を輩出しました。これが一般民衆、とくに学生、青年たちの怨嗟の的になっています。ドイツでは一八一四年フランスからの解放戦争の後に学生たちがヴァルトブルク祭を催しましたが、これが過激な反ユダヤ主義に発展しています。その裏に、ユダヤ人たちは、戦争によって太ったという論理です。こういう論理はナチスによっても使われています。

### ユダヤ人の教育熱

ところで何故ユダヤ人はキリスト教の支配している市民社会の中のエリートに入ってしまったのか。その大きな原因は、ユダヤ人の子供に対する教育熱の高さです。教育熱といえば日本人などは世界一高い。またアジアの科挙文化圏にある国々、中国、韓国、台湾など盛んです。これと較べるとヨーロッパの国々ではそんなに盛んではありません。考えて見ればこの方が真面目だといえるでせう。

ユダヤ人は家庭の教育でトラーを教え、優秀な頭脳の子はラビの家系の中に入る社会的了解があったようです。ユダヤ教はキリスト教の聖職者が独身制をとったのに対して、聖職者の妻帯を認めて、性的快楽に寛大でした。ラビの家系には優秀な後継者を得ました。これが一般家庭の子供への教育とあいまっていたのです。ですから、ユダヤ人の政治解放後、子弟を西欧の大学へ入学させたのです。ドイツ人の方はカソリックよりプロテスタントの方が教育熱が高かった。それは推測するのにカソリックは独身制を固持し続けましたが、プロテスタントは牧師の妻帯を認めました。したがって、ドイツの学者には「牧師館」の子という、牧師の息子が多く、またニーチェやユングのように偉大な学者を輩出したのです。

このようにして見た場合大学への入学率は、ユダヤ教徒（改宗者も含めて）が断然高い。そしてプロテスタントはぐっと低く、カソリックはさらに低いといえます。

彼らは大学を出て、どの分野の職業に就いたかと申しますと、圧倒的に医師と法律家（弁護士と法学者）だったわけです。ここにはユダヤ人たちは殺倒致しました。ウィーンの医学部の一部では余りのユダヤ人の殺倒のために東部ユダヤ人出身者を認めなかった位です。これはこれらの職業が締め出されなかったからです。医学では生理学者のパウル・エーリッヒや、精神分析のジクムント・フロイトなど世界に名を残した自然科学者が輩出されます。法学を見ますと、ドイツ法学の碩学といわれる法学者は殆んどがユダヤ人であったといっても過言ではありません。彼らは固有法のゲルマン法系を敬遠して、ローマ法を目指しているのです。たとえば、法治国家論の生みの親のF・J・シュタール、国法学者のパウル・ラーバント、ゲオルク・イェリネク、ハンス・ケルゼン、法社会学のオイゲン・エールリヒなどを挙げる事ができます。ユダヤ人なしにはドイツ法学は語れないといってよいでしょう。これはドイツの法学が非政治的であって、ユダヤ人としては医学・自然科学と同じく政治から身を隠す事ができた学問だったからだ

と思います。ところが皮肉にも、中立性・客観性・相対性・非国籍性の立場そのものがナチスによって指弾されることになるのです。

さて、大量のユダヤ人が大学に入り、ジャーナリスト、芸術家、教師、大学教授の職業に進出したとき、知的職業者の中に何が起るか。彼らユダヤ人と非ユダヤ人との間の競争であります。だからユダヤ人だと改宗しても宗教的理由で教授団に入るとは困難でした。ですから高名なユダヤ人学者の経歴にはその差別をくぐり抜けた多くのドラマが秘められております。

それに符節するかのように、ギムナジウムの教師には反ユダヤ人主義の煽動者が多かったといわれます。それは大衆でのポストをユダヤ人に奪われる脅威を持ったギムナジウムの教師がいたからです。ヒトラーがいたオートスリアのリンツの実業ギムナジウムの教師がそうであったのもその一例でしょう。

### 都市化現象—ゲッターの発生

ドイツの反ユダヤ主義について、今お話したような知識人の中での嫌悪の感情の外に汚なさ感情があります。、ナチスは宣伝のときに地下に増殖する鼠のイメージを流しましたが、これはゲッターに住む貧乏で、子供ばかりを生むユダヤ人の汚なさを表現しています。

もともとゲッターというのは一六世紀イタリヤのヴェネチヤに始まったものですが、東欧、ドイツで本格化するのは、社会の産業化と都市化の進む中で附属的に生じたものであります。それまで農村に分散していたユダヤ人が一九世後半になり都市に流入してきた。この時代、大都市にユダヤ人の占める率が異常に高まったのです。ハンガリーの首都ブダペストは全人口の約四分の一を占めるに至り、ユダペストと呼ばれるほどでした。こうしたユダヤ地区へ

の人口集中が、住居の衛生上の劣悪を齎らし、その閉鎖性が異宗教と異風俗を際立たせ、差別の対象として恰好なものになったといえます。

### 反ユダヤ主義の組織化

このように一九世紀の末になりますと、反ユダヤ人の運動の性格が、社会運動の色彩を帯びてくるのが特長です。これは今申しましたように、都市化のためにユダヤ人の大都市への流入が激しくなることによって、都市を中心にし、しかも反ユダヤ主義の政党がその運動を組織し、彼らの投票獲得のための好餌にしたためです。

ここにもキリスト教の組織再編成がからんでおりました。キリスト教社会労働党がその先鞭をとったわけです。その中で宮廷司祭でもあったアドルフ・シュテッカーが運動のデマゴグになったのです。この運動は、当時躍進しつつあった社会民主党に対抗するという意味をもっていました。彼らは、社会民主党が労働者を教会から離脱させようとする動きを封ずる手段として政党をつくったのです。こうしてプロテスタントの側から労働者の票を集めようとなりました。ビスマルクはこの両者の抗争には静観して漁夫の利を得ようとしていました。というのは、ビスマルクの側近にはユダヤ人が多かったのです。この労働者の社会主義の組織に拮抗するプロテスタント側の組織政党は、反ユダヤ主義をそのスローガンに加えたのです。それに対してカソリックの側は中央党という巨大な組織政党をつくっていったのですが、彼らはユダヤ人問題を取り上げようとしませんでした。

しかしプロテスタント系から端を発した「ベルリン運動」とはまさに運動の大衆化現象をあらわしていたのです。Antisemitismus (反セミ主義) という言葉が時代用語に登場したのはこの時でした。

## 中間層—反セミ主義の温床

いわゆる中間層といえば、歴史学でナチスを支えた投票基盤として指摘されます。当時の反ユダヤ感情をもっとも敏感に共有した階層でして、自由業者、牧師、農民、ホワイトカラー、職人、店主、官吏から成っています。中でも商店従業員団体である「ドイツ国家商店員連盟」が急進的な反ユダヤ主義の煽動的役割を果たしてきました。

一般に中小企業が反ユダヤ感情からナチスの票を投ずるに至ったことは、ドイツでは余り大規模な百貨店が育たなかったことと関連しているようです。百貨店は中小賣商と競争相手になります。アングロ・サクソンとは違って、早くから社会福祉の観念が中小企業保護の政策にあらわれていたドイツでは、百貨店の経営の多くはユダヤ系資本でありました。ナチスが始めてつくった綱領でも百貨店による中小企業の抑圧を批判するスローガンをその一つに加えていたことは、そうした国民感情を汲い上げていたわけです。

## ユダヤ人のとった政治的性向

それとユダヤ人の政治的傾向について述べる必要があるかと思えます。これを一口にいうには余りにも複雑で断定的に結論づけることは難しい。しかし一ついえることは、一九世紀の前半の同化政策が進んでいる段階では、ユダヤ人は体制側に寄っていました。宮廷勢力とも結びつきが強い。たとえば法治国家論を唱えたJ・シュタールにしても、法学者ラーバントにしても左翼に対して保守的なイデオロギーの砦になったおりました。

ところが、一九世紀の世紀末から二〇世紀初頭にかけて、ユダヤ人のイメージは変わっております。ユダヤ人は自由主義、社会主義の傾向を帯び、反ユダヤ主義に対してもユダヤ人の防衛組織づくりを始めております。しかも市

民政党である自由思想連合とか、社会民主党の論客ないし指導者になったのです。ロシヤ・ポーランドの東欧からきたユダヤ人たちは急進的に左翼化致します。ローザ・ルクサンプルクやスバルタクス団などを見ても分かります。

### 婦人解放—ユダヤ弁護士

ユダヤ人たちは次第に婦人解放運動に参加し、帝政期の自由派の政党である自由思想連合と連帯していました。「母権制」という六一年に公刊されたバハオーフェンの理論は、女性解放に大きなはずみをつけました。この理論はとっとり早くいえば、始めに女性ありきということで、今日われわれが無意識に前提にしているのは男性優位の資本主義社会であり、キリスト教社会である。先史時代に女性支配の時代があったというのです。これはマルクス理論とは違った意味で衝撃的な力をもちました。実はこの理論に着目したのはマルクスでもあり、エンゲルスでもあったのです。婦人解放のために大々的に利用したのは、社会民主党の党首であったA・ペーベルだったのです。こういうわけに社会解放運動、婦人解放運動は多くユダヤ人の婦人弁護士であった。そのため社会民主党はユダヤ人の党だというイメージが固まっていたのでした。

### マ ス コ ミ

その上マスコミ関係に一八四八年革命以降ユダヤ人が進出していったいきさつがあります。ドイツの新聞は、ヨーロッパのそれと同じように、比較的政治的姿勢がはっきりうち出されております。日本の大新聞のように政治的主張に変わりがないのとは違っています。ユダヤ人は新聞、雑誌のオーナー、編集者、記者の多くを占めています。たとえばベルリン発行の新聞二一の中一三がユダヤ人所有、四つにユダヤ人が参加しており、残る四つだけがユダヤ人と関

係がなかった状態です。しかもリベラルな論調の新聞はユダヤ資本が独占しておりました。これらの中に政治的風刺でもって体制を批判するものがあつたのです。ドイツのリベラル派の、三大新聞のフランクフルト新聞、ウルシュタイン系のフォス新聞、モッセ系のベルリン日刊紙、これらは日本の留学生も愛読し、世界的に読者層をもつた新聞ですが、いずれもユダヤ系資本であります。ちなみに日本に法律顧問として来日し、地方行政の制度の礎をつくつたアルベルト・モッセはその一族でした。その上新聞欄の中でもよく読まれた演劇批評、文芸批評、書評をしたり、劇場監督になつたのがユダヤ人であつたわけです。

ところが、世紀末段階になるとこれらのリベラルな新聞に対して公然と反ユダヤの論陣を張つた新聞・雑誌が現われます。大衆雑誌「ガルテンラウベ」は、異常なほど高い発行部数三八万を擁した雑誌で、茶の間の主婦など一般市民の輿論操作に役割を果したのです。編集者グラガウは、一連の反ユダヤのキャンペーンを張り、泡沫会社の発起人と株式投機の九〇%はユダヤ人であると煽つたのであります。これなど五〇年後のナチスの宣伝の原型になつています。ですからマスコミの間で大新聞の親ユダヤ的傾向と国民雑誌の反ユダヤ主義との緊張が、すでに世紀末には社会現象としてあつたといふことがいえます。

## 人 種 理 論

ナチスのユダヤ人の迫害を考えると、数の計算し尽されない被害者の量は、世界史に類例のないものでしたが、その手段の中にも冷徹にして醒めたものを感じとられます。それは「処理」の仕方ザスリヒェイトに即物性が顔を出している。つまり動物の屠殺と変わることなく、ベルトコンベア式なのです。そこにはアフリカの難民問題、または中欧の民族問題に見るような、異民族への憎しみ、原始への回帰を思わせる野蛮性といったものはありません。収容所でモーツアル

トの音楽を奏しながら死に向わせる異様な風景がそこにあります。

何故ナチスはユダヤ問題を「処理」するために、官僚の命会系統に従ってメカニズムを通して人間を死に至らしめたのか。この「処理」の方法が擬似科学によって正当化されていたことが認められませう。

そのためにナチスが使ったのは生物学の理論でした。生物学から分岐した種族理論でした。ナチスは一九二〇年のナチス党の二五箇条でユダヤ市民の合法的な追放宣言をしました。政権を獲得してからニュールンベルクにおける自由の党大会（一九三五年）に人種法をつくりました。ユダヤ人とドイツ人あるいは同族の血を享けた公民との婚姻は禁じられ、兩人種間の内縁関係も禁止されました。違反者は人種的汚辱として死刑に処せられることになりました。ユダヤ人の男と一度同衾しただけで、その血は永久に毒される。他人種の精液は女性の子宮に吸われ、血の中に入るという言葉を流したわけです。

これらはナチスが行なった優生法と表裏一件のものになっています。民族浄化を謳って身体障害者の断種を行うわけです。こうした種族理論は、血液を基準とした擬似生物学と民族主義とを結びつけたものでした。

ヒトラーも「わが闘争」の第一章の「民族と人種」で「文化創造者」と「文化運搬者」と「文化破壊者」と三分類し、最初がヘラス人（古代ギリシヤ人）とゲルマン人種、二番目が創造性がなく、他民族の文化に装飾を加える日本人種、最後が破壊しながら他民族の文化を引き継ぐ寄生虫といっているが、こうした発想は、ドイツのゴビノー、チェンバレンによって路線が敷かれた人種哲学に依拠している。アーリア人種や北方人種の優位が進化論の適者生存に裏づけられているのです。

## 社会ダーウィニズム

ドイツでは一八九〇年代になりますと、この社会ダーウィニズムが普及し、これが卑俗な科学を売物にして擬似科学として政治イデオロギーに利用されるようになります。これがユダヤ人問題に用いられない筈はありません。社会ダーウィニズムは、競争社会である資本主義体制にあつたイギリス、アメリカ、フランスを問わずヨーロッパ各国に見られた現象でした。しかしドイツはユダヤ人とアリア人との人種的区別が社会ダーウィニズムに現実性と緊迫感を与えたということができません。

そうすると、社会ダーウィニズムはかつてキリスト教とユダヤ教との闘争という宗教的争いから代替したことになります。社会ダーウィニストはかつての司祭に代って、今度は科学の名の下に白人種、アリア人種、北方人種の優秀性のスローガンをかかげ、反ユダヤ主義の運動の推進者になったのであります。

キリスト教信仰の喪失に代って、非アリア民族に対する新しい十字軍運動になるわけで、この段階になると、ユダヤ人との闘争は、永遠の闘争になります。もはや「改宗」すら許されないので。かくてユダヤ人の根絶が正当化されるようになります。日常生活の皮膚感覚スキンシップを通じたユダヤ人嫌いから進んで、「種族」「血」「土地」というパースペクティブから反セミが前面に出てくることになります。実際に多くの反ユダヤ人運動が起った中心地を調べますと、必ずしもユダヤ人の人口比が高くない。そこに必ず種族理論の指導者がでているわけです。

## ヒトラーのユダヤ人観

では、一体ヒトラーはいつの段階で反ユダヤ主義者になったのでせうか。それについてはヒトラー家の家系をたど

って見ますと、不思議な謎が隠されています。これはオーストリア政府の調査によるのですが、最終的に結論がでないにしても類推させる資料を提供しているのです。いうまでもなく、ヒトラーはオーストリア領のブラウナウという寒村で生まれているのです。ですからヨーロッパを騒がす存在になって慌てて怪物の素性を洗ったというのが真相でせう。

アドルフ・ヒトラーの父アロイス・ヒトラーは、マリナ・アナ・シツクルグルーバの子だが庶子であった。アロイスは認知されなかつたので、母方の姓を名乗つたのでした。四十才の時ヒトラーと名前を変えたのです。そのマリナ・アナ・シツクルグルーバは懐妊当時に、ウィーンでロスチャイルド男爵の家に召使として雇われていた。そして彼女はロスチャイルド家の一員との間と結ばれたというのです。もしそれが本当とすれば、アドルフ・ヒトラーは四分の一ユダヤ人ということになります。その可能性は考えられるわけですが、何しろ彼の生れたブラウナウの周辺は、一般に人々の戸籍がはつきりしない。日本では江戸時代人別帳があり、寺での管理がととのえられています。ですから自分のルーツを岐ることは比較的容易です。しかしヨーロッパでは、一般庶民の血脈を遡るための資料は欠けているのです。これはキリスト教が祖先崇拜を禁じたということにも帰因するのせう。

私もこのブラウナウに行ってヒトラーの生家、学校、遊び場、父アロイスの墓を訪ねました。父の写真が墓に埋められており、ヒトラーとよく似ておられます。とにかく鄙びた所で、ヨーロッパの文化の果つるところという感じでした。父アロイスは苦勞して税関吏となつて、退官して村の居酒屋で税関吏としての経験談や政治論議をするのを楽しんでいたようで、彼は一九〇三年にレオンジングの居酒屋で卒中で亡くなつてゐる。私がヒトラーの跡を追う旅の途中寄つた居酒屋がたまたまその店であり、店の主人がそこでアロイスは亡くなつたのですよとソファを指さして説明して呉れました。驚くことにそれは当時のままだといつていました。時間が停滞しているという感じでした。

そのような田舎ですから、おそらくユダヤ人との接触はないと思つていたのです。そのアロイスはブラウナウで税関吏として働いていたときに、ウィーンのプリンツという名のユダヤ人をアドルフの教父として選んだといえますから、ますます不思議です。ここらは詳しく調べると面白いのですが。そういえば若い頃のヒトラーの、群衆の中にまじっている顔をとらえた貴重な写真がありますが、髭をはやしたユダヤ人のようだと見られないことはない。ナチス体制下で、ナチス首脳部をからかった流行語があります。「ヒトラーのようにブロンドで、ゲッペルスのように背が高く、ゲーリングのようにスリムで」という言葉です。これは純粋なアーリア民族の典型が金髪ブロンドで、背が高く、長頭で顔は細長く、あごの線ははっきりして、鼻は細長く高く、益膚の色はバラ色であったことから擲揄したのです。

現在ではオーストリアの研究家クラインによつて否定されていますが、真偽のほどは分らない風説、ヒトラーの中にユダヤ人の血が流れていたのではないか、というミステリーの臆測を働かせるのは、彼の薄黒いちよび髭がオリエンタル的脈を思わせるからです。そういうえば、旧ソ連のグルジア出身のスターリンが実はユダヤ系であったことが最近になって始めて分つたと報じられていますが、歴史は今後何を証明するか分りません。

### 反ユダヤ主義の温床地ウィーン

とにかく、ヒトラーはレンツの実業ギムナジウムから画家を目指してウィーンにやつて来たわけですが、ハプスブルク家をパトロンとした芸術の都ウィーンでは、芸術家の世界はすでにエスタブリッシュユされています。ここでも、試験体制にはずれて、貧困者の群に入るわけです、この環境の中でウィーンでの反ユダヤ主義と出遭つたことになり、と申しますのはウィーンこそヨーロッパの近代的な反ユダヤ主義の温床地であったからです。ハプスブルク王

朝の啓蒙政策でユダヤ人を受け入れたために、ユダヤ難民の受入れ口になったのです。ロシア・ポーランドの東欧ユダヤ人がウィーンに流入してきました。ポグロムと呼ばれるロシア・コサックによるユダヤ人大虐殺から端を発して、玉つぎのようにユダヤ人は西部へと難を逃れて避難してきました。これはアシケナージ系のユダヤ人の民族移動であったのです。その終着点がウィーンであった。ウィーンにユダヤ人区画地であったレオポルド地区はその集結地になりました。精神分析のフロイトも小さなときに父親と一緒にそこにやってきている。またフッサール、カール・メーナガー、ケルゼンも在ウィーンのユダヤ二世世であります。

ところが東方からやってきたユダヤ人たちは、伝統的なユダヤ教の戒律を守り、カフタンの衣服を着用しており、同化などは全く受けつけない原ユダヤ人的性格をもっております。しかし一方で多くのユダヤ人は生業のために売春の仕事にもかかわっています。ユダヤ人の犯罪率も高くなる。

こうして従来長く西欧に住み同化したつあつたユダヤ人と東方ユダヤ人との間に歴然としたイメージ差ができてきます。ウィーンが反ユダヤ主義の温床になったのは、国境を越えてやってきた東方ユダヤ人に対する嫌悪が引き金になっているのであります。

いかにウィーンの市民感情にユダヤ人嫌いがうつ積していたかは、反セミを謳ったルエガーが、首都ウィーンの市長に当選したことで分かります。彼の当選には皇帝も反対していたにもかかわらずです。皇帝がルエガーの市長就任を拒否したとき、フロイトは喜びの余り、禁煙していたのに煙草の度を過したといっています。

ウィーンでは「オスタラ」という雑誌が街に出廻り、アリア人種の絶対的優越性と、ユダヤ人を初めとする劣等人種の除去を謳っていました。自称ゲオルク・ランツ・フォン・リーベンフェルスが主に執筆し、発行していました。ヒトラーも愛読者の一人であります。ここには民族問題が深い影を落していたことが分かります。ヨーロッパの東の

側の民族に対する危機感である。ドイツにとってポーランドからスラヴ民族の滲透による、東方脅威が知識人を含めてプロイセン建国当時からあったのです。

### 反ユダヤ主義の地理学

そこで、オーストリア・ハブスブルグ帝国の首都で起った反ユダヤ主義をヨーロッパ全体の俯瞰図から見ても必要があらうかと思えます。東方ユダヤ人の排除を掲げたルエガーの市長の当選、大学での公然たるユダヤ人学生の拒否、これらの波が隣国ドイツに波及してきます。当時ドイツではオーストリア・ウィーンほどの運動は厳しくありませんでした。ウィーンの知識人はベルリンに逃れていきます。イエリネク、ケルゼンなどは知的難民なのです。

一般にヨーロッパではポーランド、ロシアと東部にいくと、運動が粗野であり、攻撃的であり、残虐さもはげしいということが出来ます。それがドイツから西に行き、フランス、イギリスにいくに従って、反ユダヤ主義の感情はありとしても、運動化する機会が少なく、また洗練され、陰湿さを帯びている。これは東部では、農業の構造が停滞性を帯び、ツァー体制の下での封建秩序が温存されていたことによつています。貧困な農民より下なる地位にあることを甘じなければならなかったユダヤ人は、農民たちの不満のはけ口になった。ボグロムはロシアの農民解放後（一八六一年）のユダヤ人襲撃は、その後一九〇三年、一九一七年の波となり繰り返された。アシュケナーシ系統のユダヤ人は、前述のように、次々にボグロムによつてウィーンやブラハをはじめ大都市に避難したのでした。

ところが、フランス、イギリスのように資本主義が順調に発展したところでは、始めの段階では高利貸資本主義であつたために、ユダヤ人は高利貸資本家として成功し、冒險資本主義として国境を越えた貿易事業でも財をなしております。西欧に住みついたユダヤ人はスファルディ系といつてエルサレムから離散して北アフリカ、スペインに移動

した人々の後裔です。スペイン追放後イタリヤ、フランス、オランダ、イギリスに移った人々であって一般に富裕であつて、異邦人との間に比較的有妙な関係をもつことができたのです。

フランスの反ユダヤ主義は世紀末に起つたドレフェス事件に典型を見ることが出来ます。事件の当事者が参謀本部付砲兵大尉で、軍事秘密を漏洩したかどで位階剝奪と流刑を宣言されたことから始まっています。事件を見ると、ユダヤ人が軍事機構のエリート上層部に入つており、彼に対する救援活動は知識人からなされており、ゾラの大統領あての公開書簡によつて新聞論調と世論が二分されております。しかも裁判は一八九二年から一九〇〇年にわたる八年余の長期にわたるものでした。

またオランダのアムステルダムにはスファルディ系のユダヤ人がさして宗教的緊張関係なく貿易・商業で活躍しておりました。ここにはカントにも影響を及ぼしたスピノザが西欧の科学と格闘していました。『アンネの日記』を書いたアンネの周辺には、ナチスの占領によつても長く匿まれる環境があつたとも考えられます。

だから西ヨーロッパのユダヤ人への感情は、根強い反ユダヤ主義に裏づけられていたとしても、ストレートな排除を認めない、拒否と受容との複合がそこに認められるでせう。

したがつて東欧から西欧に向うにつれて、反ユダヤ主義の運動の鋭角は鈍くなつていく。ドイツはその中間にあつたわけです。ユダヤ人問題については、やはり東部から民族移動による野蛮な文化の来襲という脅威とだぶつていたと思います。彼らには東からの民族との混合によつて純血な民族の血を失なうことへの恐怖があります。ワイマール共和政時代に純血なアーリア民族は僅か5%だといわれていたのです。ドイツ人はフランスやイギリスとは異なる地理学的な力学の中で、ユダヤ人問題を考へていたことになるわけです。

## ナチスのユダヤ人観

ではナチスのユダヤ人観はどうだったでせうか。ヒトラーはウィーンで売春を生業とするユダヤ人を目の前にして嫌悪を感じたわけです。しかし貧乏であったヒトラーはユダヤ人医師ブロッホに助けて貰っているし、親切な家主もユダヤ人であったし、ユダヤ人の美術商の好意で彼の水彩画を高く買って貰っている、だから個人的なユダヤ人への感情は嫌悪と感謝の入り雑ったものであったろうと思います。

しかしながら急速に高まりを見せた、ゴビノーやチェンパレンらの人種論、社会ダーウィニズムの風潮の中で、彼のユダヤ人観は固まっています。だが、この反ユダヤ主義はナチスの反資本主義、反自由主義のイデオロギーと一体のものであることが分ります。ナチスは社会主義を標榜したのです。そして党の綱領でも労働なき所得の廃止、利子隷制の打破、戦時利得の没収、営業の国有化、土地制度の改革、土地投機の抑制、百貨店批判、これらはいづれも思想の核心に反ユダヤ主義と連鎖しているのです。

## 「民族主義」的批判—インテリゲンチア嫌悪

社会ダーウィニズムとともにナチスにとって栄養素になったのは、「民族主義的」という合言葉で表現された民族主義イデオロギーです。これは世紀末には知識人、出版編集者をふくめて風靡した時代の思潮でありました。ナチスの党の機関紙の名は「民族主義的観察者」であったことから、ナチスの体質をうかがえると思います。

ところが、ヒトラーは個人的に「民族主義的」という言葉を嫌がりました。それはこの言葉が帝政期、ワイマール共和政期に知識人や学生運動にも用いられていたからです。ヒトラーのように反インテリゲンチアで固まった人間に

とって、「民族主義的」という言葉は、知識人や有閑な学生たちの手垢のついた言葉にしかとられなかったのです。

古い党幹部の民族主義の重用とヒトラー個人の軽蔑のズレは、ヒトラーの個人史の中にひそむ、体制エリート階層へ反撥にあると考えられます。上昇志向に燃えた彼がエリート階層に参入しようとして必死の努力にもかかわらず、ドロップアウトしていた挫折の心理がここに働いております。

自分が周りから「税関吏殿」と呼称されていた父アロイスは、自分の子も官吏になることを望み、嫌がる息子にこの職業（官吏）への愛着と喜びを自覚させようと躍起になって説得しました。しかし子供のヒトラーは頑なに反対し続けました。実業ギムナジウムに入ったが、ヒトラーが芸術家—画家—になろうと父親に告げたとき、「絵かきだと？ 芸術家だと？ 俺の目の黒い内は断じてそうさせない」と父親は拒否しました。このあたりは、今日の受験体制の中にあつて、自分の将来の職業選択に悩む若者の心理に通ずるものがあります。青春期に経験したヒトラーのエディプスの葛藤は、彼の人生観にとって外傷になっております。

ヒトラーは学校に入っても自分で画家として必要だと考えたものを真剣に勉強したが、無意味と思うものや自分で面白くない科目は徹底してさぼった。だから成績は「優」や「良」がある代りに「可」や「不可」があった。地理や世界史はクラスで誰より良かったと自慢しております。

こうしてエリートへの途を用意された学校教育に絶えず不満をもち、父親の死後画家になろうとして、美術学校の試験にも失敗して、貧民の群れに入ったヒトラーは、エスタブリッシュされた社会への怨念をずっと持ち続けたのです。大学のインテリゲンチヤへの嫌悪が、前に述べました「民族主義的」という言葉の中にさえ、旧体制エリートのもつ腐敗を見つけたのである。彼にとって旧体制エリートの中に巢食っているのがユダヤ人であった。ヒトラーにとって、ユダヤ人はウィーンの街をうろつくカフタン服のユダヤ人だけではなく、「同化」によって西欧文明の担い手に

なっているユダヤ知識人こそが、文化創造するドイツ人の魂を破壊する元凶と見ていたのであります。

### ナチスの宗教観

ではナチスの指導者はどういう信仰をもっていたのでせうか。ナチスの指導者がオカルト主義者であったことはよく指摘されております。ウィーンで発行されていた「オスタラ」もオカルトの雑誌でした。またオーストリア、ドイツのトゥーレ協会が北欧神話の研究団体として結成されており、その中に『二十世紀の神話』のA・ローゼンベルクやヒトラーの後継者とされていたルドルフ・ヘスが属しており、ナチスの釣十字ハーケンクロイツのものになったスヴァティカをシンボルとして採用しています。

これはナチスが宗教政策的にユダヤ教とキリスト教に反対していたことの裏返しであります。ですから彼らはキリスト教的慈悲、愛、同情、人間性を拒否しました。そうすると彼らは神を信じない無神論だったのでしょうか。そうではない、彼らは有神論者であったと思います。

ドイツのプロテスタント教会はナチスの宗教政策に反対しつつも一部の神学者（ボンヘッファー、カール・バルト）を除いて強い抵抗力はなかったのです。プロテスタントはカソリックよりもユダヤ教（旧約聖書）とキリスト教（新約聖書）との一体性を教義の中心においてきました。ルターも初期には熱烈にユダヤ人とドイツ人の血脈の同一を説いていたのです。一九世紀から二〇世紀にかけてのプロテスタント神学は、高まる反ユダヤ主義の、運動の中で、旧約聖書と新約聖書との間の論理的連鎖性を証明しようと努力をしてきたのです。有名なマックス・ウェーバーの『古代ユダヤ教』も、現代のプロテスタントの合理的論理観は、古代イスラエルの予言者の合理的倫理性からの系譜をもつものであることを立証しようとしたものでした。

ところが、プロテスタント教会は、ドイツの民族主義運動の高まりとともに、異教とされてきたゲルマン固有の信仰の復興の動きを前にして、次第にキリスト教のゲルマン化を許すようになる。プロテスタント教会の抱えたこの矛盾は、ナチスの点火することによって分岐するに至ったのです。ナチスは政権をとるやプロテスタント教会にもアーリア条項をつきつけたのであります。いまやナチスのアーリア条項の導入をめぐる、抗議して結成された告白教会は多数派になり得ませんでした。ナチスとの妥協を図るドイツ・キリスト教信仰運動との対立になります。後者の方は旧約聖書をユダヤ的として排し、新約聖書のイエスをユダヤ人でなく、アーリア人であると教義を変えざるに至ります。ここでは宗教問題を詳しくお話することはできませんが、ナチスの首脳部は告白教会とドイツ・キリスト教運動の圏外にあったと申せませう。

アウシュヴィッツのホロコーストの責任者であったアイヒマンは、逮捕され、絞首台に上ったとき、最後に力をこめていった言葉は、自分は *Gottgläubiger* だということでした。この言葉はナチス時代に流行した語であります。ナチス党员として当然でせう。今日あまり耳にしないこの *Gottgläubiger* の信仰は、もともと「自由宗教」の信仰からきたものです。これは教会から自由であることを標榜するのですが、無宗教でなく、自由な宗教をもつというものです。これはしたがってダーウィニズムを受け入れ易く、ドイツ信仰運動と親和性を持ち、インド・ゲルマンの普遍的多神教を基礎にしたものであります。スウァティカを生んだ北方のアーリアの民族意識に応えたものであります。彼らは、ユダヤリキリスト教を解体し、ユダヤ人の旧約聖書を排除し、新約聖書のイエスをアーリア人種に解釈替えして、徹底してユダヤ性からの清浄化を図ったのです。

## 水晶の夜

私のお話も時間もなくなり、締めくくりをつけなければなりません。ドイツで一九三八年に衝撃的な反ユダヤ運動が起こりました。一九三三年に政権をとったナチスの体制の下で、この年までユダヤ人に対して個人的な嫌がらせはあったにせよ、ユダヤ人は自らをなぐさめて将来の悲劇を考えたくないという気持をもっていました。ドイツ帝国のドイツ国籍を持ったユダヤ人五〇万の中故国を離れたのは、一五万に過ぎなかったことはそのことをあらわしている。しかし一縷の望みは絶たれました。

それが一九三八年十一月九日から十日にかけての夜の事件です。多くの商店のショーウィンドーが破壊され、窓ガラスの破片が街路に散乱して、街灯の下に冷たく輝やいていたことから「水晶の夜」と呼ばれる歴史的事件です。ナチスがユダヤ人の商店、住宅、シナゴークを破壊し、略奪を行ったわけです。この事件の発端はパリ公使館書記官エールンスト・フォム・ラートがユダヤ少年ヘルシエル・グリーンシュペーンによって暗殺されたのを機に起ったのです。ユダヤ少年は、ポーランドへの強制移送された家人の帰還を訴えようとした。彼は同性愛行為の見返りとして、ドイツへの再入国手続に便宜を図ってやるという約束を書記官が守らなかったために発作的に行なった犯行でした。それを機に最初は地方の管区指導者によって組織的に暴行が加えられておりました。ところが十一月九日に宣伝省大臣ゲッペルスが演説を行なって報復行為を賞讃したことから、ナチス突撃隊その他が組織的に動員されて、ユダヤ人の住居に侵入し、多数のユダヤ人が強制収容所に送られます。アウシュヴィッツへの途が始まったわけです。いまや合法的テロが認められました。ヒムラーはここでユダヤ民族の強制移住とその民族の根絶を宣言しました。このユダヤ人の排除には、生活不能者、不治の病人、ジプシーと浮浪者の絶滅、スラブ民族の間引という人種問題が一体になって

いたのであります。

以上、ナチスとユダヤ人というテーマを二千年にもわたる長いスパンの中でお話して参りました。私は焦点をナチス体制の下でのユダヤ人というところに置きましたが、あえてキリスト教の成立期にまで遡って見ましたのは、ナチスによるホロコーストが現代史の中に突発した事件と見るのではなく、ユダヤ人に対する嫌悪感がドイツ人の間に、間歇温泉のようにある時機、ある時機に噴出しながらも、潜伏していたんだ、ということをお願いしたからであります。

それはドイツの倫理感の中に紀律化が進めば進むほど、運動の組織化が目立って参ります。たしかに、各時代に見られるユダヤ人に対する虐殺は、集団心理による野暮さが見られますが、その規模は大型なものになっています。最終的には、アドルフ・アイヒマンのいった「十人の殺人は惨殺だが、一万人の殺人は統計だ」という境地にまでいきつくわけです。人種の絶滅がビジネスライクに机上で設案し、計算されていきます。

しかしわれわれはアイヒマンがヒトラーの命令の下に単々と命令遂行したというだけでは腑に落ちないところがあります。矢張り深層のところユダヤ教とキリスト教との二千年にわたる確執が、沈澱しているように思われます。その解明はとても難しく、お話することができませんでしたが、今後の私の課題にして話を終らせて載きます。御静聴有難うございました。

※※※※

この稿は、五年前（六月十一日）、芦屋市立公民館で行なった講演を掘り起し、若干手を加えたものである。随分長い間筐底に眠らせていたが、今年度の当法学部のセミナーで「ユダヤ人」をテーマに取り上げることにしたので、

学生諸君に予備知識を与えるという気持で発表することにした。だから参考文献を挙げていない。

ところで法学部には、ナチス研究で有名な歴史学者中村幹男教授が来学され（この講演の後に）、講義をされている。同教授の優れた著書は『ナチ党の思想と運動』（名古屋大学出版会）である。あわせて参照して戴きたい。